

文化高知

'93年5月 NO.53



中山高陽「酔李白図」の部分

田舎の美風を街に

小野 義三

「生活大國五カ年計画——地球社会との共存をめざして」、平成四年六月三十日の閣議を経て、世の中は経済大國から生活大國への変革をめざそうとして新しく出発したところである。世の中は、経済の時代から心の時代へ変わっていかねければならない。五カ年計画でも述べられているように、一人ひとりがお互いに尊重し合うことが、これからの社会のポイントでないかと思われる。物を大量に生産し、大量消費をする時代は去った。これからは、心を豊かにする時代を創っていかねければならない。いわゆる環境破壊の時代も去った。心をどのようにして豊かにするかがこれからの課題である。

私達も同じだが、団地から中心地等へ朝早く出勤し、夕方あるいは夜遅く帰ってくる、いわゆる団地族が多くなってきた。この団地族は、お隣りが何の仕事をしているか知りもしないし、また特定の人以外に近所付き合いがほとんどないのが実情である。月曜日から金・土曜日まで、主人は勿論、最近はお婦人も勤めるいわゆる共働きである。私は日曜日に散歩して団地の人達に「おはようございます」と声をかけることにしているが、こちらが声をかけると必ず「おはようございます」と応答がある。しかし、一般の人達は普通見知らぬ人同士は挨拶をしない。これが団地での生活の実態である。挨拶は既知の人間同士の朝晩の定型の言葉だが、むしろ団地内で生活する名前も知らない未知の人間同士が、散歩などで会った時「こんにちわ」とか言葉をお互いに交わすことが、本当に世の中を和やかにするものではないだろうか。

か。一人ひとりがお互いを尊重し合うことになると思われ、そして精神的な豊かさもお互いに共受することのできるのではなからうか。

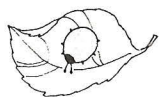
九州を旅行すると西鉄バスの運転手さんは、必ず朝は「おはようございます」と挨拶してくれる。ほんとうに心が和むものである。しかし、県交通・土電のバスの運転手さんの中には「おはようございます」という挨拶はおろか、お客が「ありがとうございます」といっても返事もしない運転手さんが多い。残念なことである。

ヨーロッパなど外国へ旅行しホテルに泊まると、朝会う見知らぬ外国人が気軽に「Good morning」と、殊にご婦人は微笑みで声をかけてくれる。本当に心が晴れ晴れとなるのである。これはヨーロッパなど外国人の日常習慣である。このような風習は、外国ではどこでも見受けられる。しかし、東京のホテルで会っても外国人からの挨拶はない。

ところで日本でもまだ過疎地域へ行くと、おばあさん、小学生、中学生達が「おはよう」と挨拶してくれるが、これが田舎の日常生活ではないかと思う。この一言が大変うれしく心から和やかになるといふ経験を皆さんお持ちであろうと思われる。このような美風を高知の街にとり入

れたいと思うが如何であろうか。高知市の砂漠のような団地や街でお互いが豊かに心楽しく暮らす、いわゆる生活の充実を図る第一歩でないかと思うのである。

次に、この心の荒れている街を美しい心の街に進めていくには、第二弾として次のようなことを提案したい。市町村が合併により共同体は拡大されたが、詳しくみると依然として旧村各地区を中心とした慣習、共同意識が潜在している。



私が取り入れたいのは、むらの慣習というより旧町村の集落の共同意識で、町内会の運営や日常生活に、田舎のにおいのする新しい町づくりを率先してとり入れたい。

そして、高知の町に田舎の美風が自然発生し、日本で高知の街がふるさとの原点になるようになれば、住みやすい豊かな高知市が誕生すると思うのである。

(高知学園短期大学長)

思い出・丸の内高校

小笠原 八重



高知を思う時、私はいつも開校間まもない丸の内高校のことを思い出す。それは私が教員としての青春時代を過ごしたところだからと思う。

丸の内高校は昭和二十四年九月一日に開校した。当時、焦土と化した高知市内で終戦を迎えた旧制中学校と女学校は、米進駐軍の勧告による学制改革で新制高校になっていたが、改めて男女共学の高校に再編成されることになった。市内の普通科男女五高校を統合して、新しく追手前・丸の内・小津の三校にするのである。

この時何よりも大変だったのは、五校の在校生を三校に振り分けることであった。七月の暑い日に抽選が行われ、生徒たちはこよりで作ったくじを次々に引いていった。仲良しも別々の学校に分けられていくのである。

教員には県による人事異動が行われ、私は南海女子校から丸の内高へ移ることになった。こうして新制丸

の内高校の草創期は戦後日本の発展と共に歩むことになり、若い私にとっては胸躍る毎日であった。

校舎は旧第一高女跡で、戦災を受けた後に木造二階建てができていたが、講堂は四方の壁を残して焼け落ちたままであった。早速教室不足に悩んだ。結局一年生が現在の潮江中学校の校舎で授業を行うこととなり、丸ノ内から天神橋を渡って潮江までの引越であった。分校生活は翌年三月まで続く。

いよいよ初めての男女共学の授業である。私は英語の担任であったが、教室の半数以上を占める男生徒に圧倒されないよう胸を張って教壇に立った。男生徒たちにも戸惑いはあったと思うが、真面目に授業に参加してくれてほっとしたことを覚えてい

る。英問英答や発音を重視した授業であったが、生徒たちは文法に関する質問をよくした。それに応えるた

め、私はオニオンズなどの文法書を調べる教材研究に熱中したものである。

当時の生徒は優秀な人材が揃っており、何事にも積極的であった。まだ校歌も制定されていない時代に、全校生徒が声を揃えて歌える歌をというところで、学生歌が募集された。

蒼空を流れゆく雲
はてしなき希望をのせて
手をつなぎ共に励まほしいぞ拓かん
新しき道を 新しき道を

若々しいこの学生歌は、三回生の横田祥夫君の作詞である。卒業式でも歌われる程生徒たちに愛唱されたこの歌は、今でも同窓会などで歌われている(作詞者の横田君は後に尼ヶ崎病院で心臓外科の権威となるが、先年物故された)。

二十五年には「丸の内タイムス」が発刊されている。これは四国高校新聞コンクールでベスト3に入選した程、レベルの高いものであった。

これに続いて文芸誌「群生」もスタートした。青天井だった講堂に屋根ができる頃、私は英語弁論大会や英語劇の指導で忙しくなり、益々張り切っていた。

◇

ところでこうした夢溢れる丸の内高時代に、私は貴重な友に出会っている。佐藤いづみさんである。現在高知の文化活動の一端を担う「短歌芸術」を主宰され、市民図書館の歌の会などでも活躍されている。佐藤さんとは丸の内高が新設の年に共に一年生の担任になった。国語の先生として佐藤さんも大いに緊張されていて、今でも当時の苦心談を話し合っている。佐藤さんとは職場で青春を共にしたばかりでなく、短歌の面でもつながっている。佐藤さんは当時から有光滋樹さんの「短歌芸術」で活躍されていたし、私の夫影山聖二も自由律の短歌を作り、「高知歌人」を創始していた。また共に大阪育ちということもあり、よく話が合ったので、私も一層親しく交わることができた。先年影山聖二の三回忌に遺作をまとめた歌集「微塵となる人生」を出版した際には、編集という心重たい仕事をして下さった。その佐藤さんの歌碑が昨年香我美町に建立されたのは嬉しいニュースであった。

(文教大学教授)

子どもはなぜ描くのか ③

— 絵はあなたへのメッセージ —

濱田 美智

絵を描くこと、これは子どもの内面からの自発的な活動であることは、発達過程から充分理解していただけた事と思います。また、人間が最初に描くフォルムは円形も、大人から教えられるよりも自らの力で獲得し、やがてマンガ図形や太陽図形、さらに頭足人にまで発展します。この様に描画の発達過程一つを捉えても、人間は生得的に育つエネルギー（即ち、生きる力＝自己主張）を持ち合わせているのです。大人は子どもの育つ力（自己主張）を信頼し、この流れに合流し側面から援助（自己抑制）の手を指し示す役割があります。

さて前図式期（空間や位置は無関係にバラバラに描く時期）には、自分以外の事物に対する興味や関心が高まることから、三歳児の想像の世界を脱皮し、次第に現実化への方向に進み、身近の細かい環境に注意を向ける様になります。この頃を境に、描き方に大きな変化が現れます。

●「基底線」を引く

ある日突然、子どもはこれまでと異なった描き方を始めます。まず紙面の下部に一本の線を引きます。この線は大地を示し線上に人間や樹木、家等を並べ、上部の空には太陽を描きます。つまり外界を一枚の紙に描くため、一本の線を導入したのです。この線の導入は真に画期的な出来事であり、これを境に前図式期から図式期へ、つまり児童画の世界に移行します。ここで高知市立石立保育園の園児の自由画帳から優れた児童画を紹介します。



図1. R子 5.9

良しグループに入り、自分の意見が言える程に元気に成長しました。散歩している空には幸せの象徴である太陽が輝いています。自分にとって大切なものを素直に描き、全体的なバランスの良さは本児の内面の安定感をそのまま現しています。

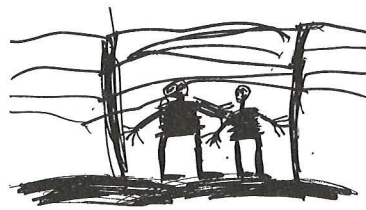


図2. E夫 5.7

も上下の空間を規定する一定の固定した軸が存在していることが分かります。



図3. J子 5.8

●「基底面」の存在

五歳児の絵を観察すると、基底線と同様の頻度で、さまざまな面の描き方があります。

図4のO夫は、園では友達から虫博士と呼ばれていて昆虫の知識が豊富です。園内の昆虫に興味を持ち始めた頃より、彼の様子は目立って落ち着いてきました。行動にも自信が持てるようになった頃、図4の絵が図4の絵です。力強い線と筆圧は大胆であり自信に溢れた表現です。

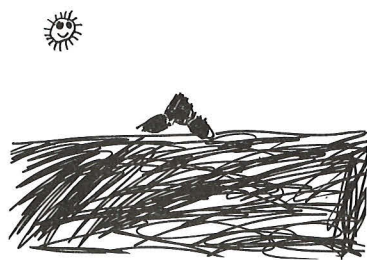


図4. O夫 5.7

紙面の半分を塗り潰して重厚な面として捉えた絵は安定感を与え、左上の太陽と地平線上の中央の三角形のトンネルとの位置のバランスの良さは、そのまま本児の感情が反映されているようです。

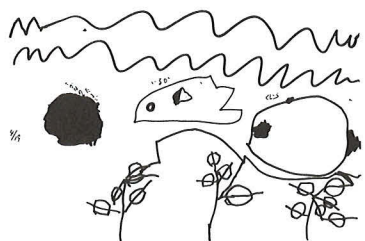


図5. A夫 5.9

図5の絵は、海中を面として捉え海底線には昆虫が生え、A夫に似たくじらが泳ぎ上部には波を描いています。綾取りや折り紙の名人である本児は、海の中の空間関係を几帳面に描いていることが分かります。

図6の「兎さんがね、氷の上で寝ているの」の絵は、O子と二羽の兎が波乗りして遊んでいるお話の絵です。本児は入園当時から緊張感が強く園生活に馴染めない面がありましたが、年長組に進級しこの様に元気になりました。絵をよく見ると、兎が波乗りしている面は波と平行に描き、本児は兎と異なった面空間、つまり陸地にいることが分かります。このことは、上下の空間認識と同時



図6. O子 6.4

に前後の位置関係も意識して描いていることが分かります。緊張感から解放された自由な感情は絵にも現れ、自由な気持ちで描き易い方法で、伸びやかに表現できています。

以上の事例からも理解できるように、幼児画には子どもの気持があるままに描かれているのです。つまり願望や感情・思考等が描き綴られたメッセージなのです。私たちは、日常の子どもの行動と絵を対応させ、一枚一枚のメッセージを丁寧に読みとり、対象児を理解する手掛かりを得たいと考えています。

●子ども達は輝いている

さらに幼児期独自の描き方をしていく絵に注目したいと思います。図7のK夫の絵は、本児が陸から海を行く船を眺めている場面です。水平線の基準が大人とは逆方向に視点を移動させています。この描き方



図7. K夫 6.4

は「展開描法」の一つであり、児童画においても独創的な描き方です。個性的で生き生きと子どもらしい本児は、特に親子関係がよく、幸せに満ちた表情をしています。

また図8と9の二枚は、描画の好きなSn子の絵です。前者は、半円型の基底線上に兎が立ち、動物も人間と同様の服を着た「アニミズム描法」で、達者な筆致から楽しみながら描いていることが分かります。一年後に描いた図9は、兎が水に映った姿を眺めている情景のある絵です。この画面には、上下と前後の空間を規定する二つの観面が克明に表現されていることが分かります。お話し絵の得意な本児には、この様な自由な発想と同時に独自の表現力が育っているのです。

今回は児童画を、特に基底線・基底面の視点から見ることにとどまり



図9. Sn子 6.2

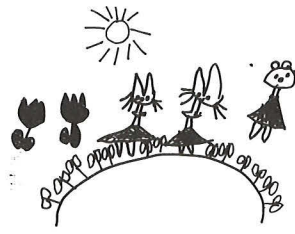


図8. Sn子 5.2

ましたが、何時も絵を通して子ども達から多くのことを学んでいます。乳幼児の世界には未知なる可能性が潜んでいて、とても魅力的な世界なのです。

幼児期は、遊びに没頭する時代です。遊びに集中できる子どもは、何事にも集中力を発揮し、その表情も生き生きと輝いていて、子どもらしいメッセージを伝えてくれるのです。（高知女子大学保育短期大学教授）

『鹿持雅澄研究』など二点

審査を担当して

中内 光昭

術的迫力の点で授賞作品に水をあげられたといえましょう。次に、授賞作品について、簡単に述べてみたいと思います。

『鹿持雅澄研究』（小関清明著 高知市民図書館刊）

著者の多年にわたる研究を集大成したものであり、土佐が生んだ国文学の泰斗、鹿持雅澄の学者ならびに人間としての全体像を初めて学術的に復元した注目すべき研究である、と高く評価されました。鹿持雅澄について従来の研究を点検するだけでなく、今まで人目にふれることのない飛鳥井家に残る秘蔵文書を徹底的に吟味した著者の努力が結晶したものであると言えます。構成も巧みで分かりやすく、歴史小説を読むような楽しさを覚えた、と評価した委員もありました。著者の文学的素養に裏づけられた学術書であると言えます。

著者のいわばライフワークであり当然、著者自身の過去の論文に基づいていますが、すべて今回の著書のために校訂されており、一貫性のある新しい著作と認められました。

『土佐自由民権運動史』（外崎光広著 高知市文化振興事業団刊）

少しているということです。地域の学術文化活動が衰退しているとは考えられませんので、精選されたものだけが推薦されるようになったのかも知れません。一番危惧しているのは、賞の性格が正しく理解されず、例えば高知で行われた研究であって、高知に関係の薄い研究は最初から対象外であると誤解されて、推薦されないようなことがあるのではないかと、今後一層の周知徹底が必要であると思います。もう一つは、自然科学分野の応募が少なく、結果的に授賞作品もなかったということです。昨年、医学の診断技術に関する著述が授賞したことが示すように、高知で行われた研究であれば、研究対象は高知と無関係であってもちっとも構わないわけで、宇宙や地球、海洋や生命といった一般的で、世界に通用する研究が高知県ですます盛んになることが本賞が設けられた一つの目的であると言えます。

明年度はより質の高い多数の著作の応募があつてほしいものです。最後になりましたが、熱心にご討議いただいた委員の先生方に心からお礼申し上げます。

（高知大学長）

第三回「高知出版学術賞」の審査が先ごろ行われ、三点の業績に対して去る三月三十日、賞状と賞金が贈られました。

本年も、私が審査委員長の大役を仰せつかりましたので、審査経過について、簡単に報告したいと思います。

審査は、文化振興事業団から委嘱された、秋澤繁、池川順子、今井嘉彦、紫藤貞美、西野勉、それに私の六名により行われました。

審査対象になる業績は、高知県内に在住する者の学術的著述、または他県等在住者による高知県関連のテーマに関する学術的著述のうち、一九九二年中に発行されたもので、推薦のあったものに限られました。合計二十一件の推薦があり、重複を除くと、二十点が審査対象になりました。

た。

第一回の審査委員会は、本年二月二十日にもたれ、全対象作品について内容、レベル、学術性、「高知度」などについて意見を出し合いました。このうち「高知度」というのは、著書と高知とのかわり合いの度合いを示す言葉で、西野委員の創作によるものです。本学術出版賞の目的が地域の学術研究の振興を図ることにあるので、著者の研究の本拠または研究対象のいずれかが高知に深くかかわっていることが必要条件であり、特に、県外在住の研究者が研究対象として本県関係の問題を取り扱った場合に、その関連の深さが問題になるわけで、その結果、高知度という言葉が生まりました。

一回目の審査委員会で、候補著作は五点にしぼられ、全委員がそれら

を次回までに精読し、その結果をメモ書きにして第二回の委員会に持ち寄ることにしました。

二回目の委員会は、三月十六日に開かれ、当日提出されたメモに基づいて議論の後、最終的に次の著書が授賞対象に選ばれました。

『鹿持雅澄研究』

『土佐自由民権運動史』

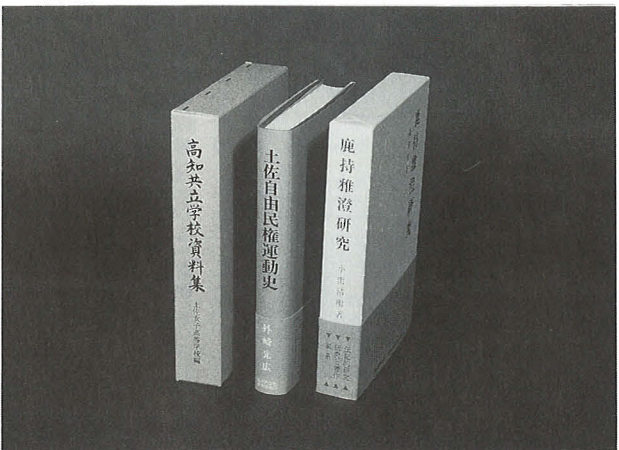
『高知共立学校資料集』

一方、残念ながら最終選考にもれなかったものうち、米原謙著『植木枝盛—民権青年の自我表現』（中公新書）は、植木枝盛の人間形成について心理学的に描写し、歯切れのいい文章にまとめられていて、読みやすい啓蒙書である、という意見が多くの委員から寄せられました。学術的にも新しい視点から枝盛をとらえている点が評価されましたが、いわば、学

この著書も著者の多年の研究の結晶であり、豊富な資料をもとに、土佐における自由民権運動の流れを記録すると共に、それと日本各地の民権運動とのかわり合いについて考察し、同時に土佐の民権運動の今日的意義についても考察されている。本書が高く評価されたのは、土佐という地域を舞台に多くの人がかかわった自由民権運動を、徹底した調査に基づき通史としてまとめあげられたことで、従来の歴史書の誤りも具体的な事実により明確に訂正されています。

『高知共立学校資料集』（土佐女子高等学校編 土佐女子学

園刊）
明治十四年立志社系の学校として設立された高知共立学校での日常のさまざまな行事、出来事、さらには学校をとりまく社会の動きなどを克明に記録したもので、同校が自由民権運動と深いかわりをもっていたことから自由民権運動に関する貴重な資料と言えます。同校は明治三十



されてきた。今回、同校の竹本義明教諭らにより整理され、翻刻されたもので、一般読者のために多くの注

て言えることは、二つあります。一つは、本年度の応募作品数が昨年度（実質三十五点）にくらかなり減

都市空間に文化の表現を

伊藤 憲介

現代都市空間の規定性は、経済優先の論理が基本となっている。しかし、最近はその意図的・表層的ではあるが、その空間を都市文化という価値観で評価することが認識されるようになってきた。この意味から、今回の都市美デザイン賞選考対象での都市施設や建築物は、地域アイデンティティを意識的に表象したのもも多く推薦され、また、それは地域環境条件を解説しながら都市空間の文化性を高めるといふ提案となっており、関心も高いものとなった。

九回目となった今回は、実推薦数三十二件であったが、そのうち、建築物以外の公園・広場等も八件あった。審査は、選考委員による現地調査と十分な討議の結果、「医療法人精華園」と「さえんば耳鼻科」の二医療施設が入賞となった。なお、特賞はなかった。

◇医療法人精華園（発注者・医療法人精華園理事長町田昭代、設計者・



医療法人 精華園



さえんば耳鼻科

(柳千頭建築研究所 代表千頭邦夫) この建築は、街筋から離れた浦戸湾沿いにある古くからの病院の増築である。浦戸湾は高知の風景として欠かすことのできない場所であるが、今は、人工的な防潮堤などにより湾の眺望が難しくなっている。ここで

はその地域アイデンティティを意識して計画されており評価された。具体的には、その立地性を生かして、山あいを抜けて視界が広がった位置からエンタランスに至るアクセ空間を、柱の対角線上にポーチを設け、大きく開放したピロティから自然景観のある裸島・衣ヶ島・玉島を望むという周辺環境を積極的に取り込んで借景空間を演出している。また、建築としてもテクスチャアを意識した素材の表現や、色調も穏やかに格調が高く、全体がソフトで明るい表情となっており印象的である。

◇さえんば耳鼻科（発注者・医療法人光風会理事長柳原亮一、設計者・柳建築工房 代表平山昌信） 「さえんば」は、まだ下町風情が残っているが、はりまや橋に近いこともあり、街並みとしても近代化が進行している地域である。そういう混沌の地に建てられたこの耳鼻科は、圧迫感を押さえるため二階建てとし、正面からは三棟（平面的には一棟の不思議建築）の屋根と妻壁を見せることで周辺環境と調和させることを意図している。建築的にも、外壁タイルの水切りや、待合室は円弧の透明ガラスで開放感を表現したり、雨の多い高知で軒樋を見せない仕掛けなど、ディテールを徹底的に追究したことがうかがわれ、非常に密度の高い建築となっている。これが、北側新堀公園の緑との調和性とともに新しい街並み空間として評価された。ただ、駐車場は必要であるが、これは部分的でも緑化して欲しかったし、波型パラペットの表現については異論があった。

(高知県住宅供給公社理事)

ライオン宰相

濱口雄幸の母・繁 (一)

近藤 直彦



土佐が生んだ最初の総理大臣、ライオン宰相と呼ばれた濱口雄幸の母の里が、長岡郡十市村国政一五七番屋敷（現南国市十市一五七）西山家であることを知る者は殆どいない。

繁は、天保四年（一八三三）西山家三代目父馬七、母伊勢の娘として生まれ、嘉永年代長岡郡池村唐谷（現高知市五台山）水口胤平に嫁し、義清、義正、雄幸の三人の男子を産む。

三男雄幸（明治三年一八七〇生）は、明治二十二年（一八八九）十九歳で安芸郡田野村（現田野町）濱口義立の一人娘夏子の婚養子に迎えられる。のちの総理大臣濱口雄幸である。

その雄幸の母繁の里、南国市十市国政の生家は現在土居護氏所有の柿畠となつているが、小高い山を開いた見晴らしのよい丘は、往時広大な屋敷であつたであろう旧土族西山家

の隆盛を偲ばせるのに充分である。

古井戸のある丘を二十メートルくらい南に東へ一つ下がった段島に、三坪（10㎡）ほどの西山家墓所があり、それが現在繁の里である唯一の証となっている。

私が初めてそこを訪ねたのは平成四年十月下旬で、囲りの柿の樹は枝が折れんばかりの果実を付け、丘は柿色一色に彩られていた。ツクツクの蟬の鳴き声は弱まり、晩秋を迎えようとコオロギがひっそりと奏でていた。

草を押し分け、墓碑名を夕暮れ前の西陽にすかして読んだ。

西山久右衛門、西山庄九郎、西山喜助の合祀碑に続き、左へ西山右衛門夫婦、西山馬七夫婦、西山栄作夫婦の立派な七墓の墓碑が南北二列に五・二と並んでいる。側に六、七基であつたと思うが、小墓が祀られているのは水子か夭逝した児たちのも

のであろうか。

繁は馬七、伊勢の長女で、二つ年下の弟栄作（天保六年一八三五生）は西山家四代目で、その長男五代目愛雄は大正七年（一九一八）、東京豊島区雑司ヶ谷に在任の四十三歳（大正二年）で大蔵大臣になった従兄濱口雄幸を頼り、家屋敷を売り、家族と共に十市の里を後にしたものである。

その年、愛雄の長男茂幹（明治三十二年一八九九生）は十九歳、二男馨（明治三十七年一九〇四生）十四歳で、茂幹が旧制高校に、馨が旧制中学に入学する年であった。

のちに明治大学の茂幹は弁護士となり、東京大学出の弟馨は大阪ガス社長となった。二人は西山久右衛門から数えて西山家六代目に当たり、雄幸が五十九歳で総理大臣になった昭和四年（一九二九）には、茂幹三十歳、馨二十五歳で、祖父栄作の姉・水口繁は二十四年前の明治三十八年（一九〇五）すでに他界している。

私が、昭和二十八年唐谷の濱口雄幸の甥・水口出世翁を訪ね、翁の麗筆の紹介状を胸に抱き、双従弟であるその茂幹、馨氏を訪ねたのは私が明治大学へ入学する十八歳の春のことであつた。

出世翁はその頃王子製紙淀川工場

長の務めを終え、ふる里唐谷で晩年を過ごしておられたが、それより五年後の昭和三十三年、七十五歳で亡くなつていく。

その当時、水口家と私の家はどういう間柄であつたのか、祖父母・父母の亡き今、とうとう分からず仕舞いになつてしまふ、私としてはその折のご縁を不思議に思うとともに、唐谷は、生涯忘れ得ない思い出深い谷となつていく。

その縁は、雄幸の母繁が十市村西山家の出であることによるのか、また雄幸の長兄義清の妻・元が同じく十市村谷脇家から嫁いでおり、あるいは私の祖父鹿太郎の姉・亀も唐谷の彼末竹吾に嫁していることによるものなのか、ともあれ、私が水口出世翁を訪ねることが出来たのは、そこらに何らかの糸があつたはずである。

面白いのは、私の母の名が「茂」で、兄が「雄幸」弟が「出世」と名付けられていることである。

注

(1) 濱口雄幸は、晩年自ら「雄幸」と名のり、昭和天皇に「臣雄幸」と言上したといわれている。

(2) 池村唐谷は、明治二十二年町村制施行により五台山村唐谷となる。

(元高知印刷株式会社製作本部長)

小旅行を楽しむ

西川 富恵



復興を合言葉に脇目もふらず働き続けて、敗戦から五十年近くたち、いつの間にか、経済大国よ、金持ちよと持て囃されるまでになり、良い気になっていたら、次第に大きな渦となって聞こえてきた働き過ぎの非難コール。各国の思惑に弱いわが国のこととて、俄に休まねばならない気になったのか、どうか。珍しく早い速度で週休二日制は導入されたのである。その経緯はとも角、すっかり変わってしまった外観とは裏腹に、精神的側面からいうと、封建時代からちっとも変わらず引きずってきたサラリーマン氣質を、この際問い直し、自分にとって働くとはどういうことなのかを考えるに絶好の機会だと思っている。

御陰様でわが夫もその恩恵にあずかることになったのだが、御多分に漏れず勤勉、実直を絵に描いた様な人間で、仕事を休むことに後ろめたさというか、かなり抵抗があったらしく、庭をいじったり、読書に耽ったりしていたが、そのうちどうにか自分流の過ごし方を見つけたよ

うである。もともと旅に出たかったが、忙しさにかまけて長い間果たせなかつたのかも知れない。地図を拡げて熱心に調べているのでどうするかと思っていたら、ある日、「行ってみたいなか」と誘われ、わが家の二人旅は始まったのである。

所謂、名所旧跡巡りではなく、

放浪の旅へ支度は地図一つ

の川柳ではないが、地図だけを頼りにふらりと出かけ、帰れそうになれば一泊するというそれこそ気儘な旅で、二人の子供達の独立後だからできたのかも知れないが、この旅で得たものは思いがけないものとなった。旅の途中で出会った人と自然。一期一会、その一瞬一瞬が美しい風景となって心に残ってゆく。二人だけの風景である。そろそろ頂上(定年)の見え始めた夫にとって、また私にとっても、人生を改めて考え、更なる頂上を目指すのに非常に役立ったと思うのである。休日を豊かに過ごすことが仕事の意欲に繋がるのを知った、と夫は言った。楽しく働けるものだとも言ったのである。

週休二日制については、したくてもできない企業の方が多く、導入は企業格差を呼び、サラリーマン間に歪みを生ずるのではないかと、勤勉を尊ぶ国民性を潰すものではないかなど、賛否両論が激しくぶつかっているようだが、受け止め方ではないだろうか。勤勉を尊ぶのは勿論大切だが、それをも度を越すと自分を見失ってしまう。働くのと同じ位休むことも必要だという認識に立ち、全ての勤労者が週休二日制を取れるような社会づくり一人ひとりが向かうべきではないだろうか。

季節は春。桜だけではなく野に咲く花も美しい。山あいには流れる名も知らぬ川の水面に揺れる光も、その光を受ける小石も遍く皆美しいのである。この世にいる間に見ておきたいではないか。次の休日あたり出かけてみようかと地図を広げている二人である。

(主婦)

二日の使い分け

寺山 忠一



私の職場で週休二日制が完全に実施されたのは、平成四年九月一日からです。現在の職場に勤めて二十数年になりますが、ふり返ってみると普通のサラリーマンと同じように、働きバチといわれるように仕事一筋に働いてきました。

そんななかでも山登り、魚つり、家族で旅行と休暇を十分に活用してきたつもりです。

週休二日になったいま大きな変化ではありませんが、少しずつ休日の休み方が変わってきています。

二日のうち一日は、自分の好きな山歩き、ス山野草を求めて友人と朝五時に起き、車で二、三時間で目的地につき、今の季節なら新緑の

中を一步一步登っていきます。足元には春先であればスマレ、フキの花などが顔を出しており、木々の新芽をながめながらの山道は本当に素晴らしい。

山道に沿って流れる谷川の清流は時にはゆるやかに、時には小さな滝を造り変化を楽しませてくれます。一時間ほど歩いてそこから山野草を求めて木々の間を歩くと気持ちいい汗をかき、ふと足を止めて周囲の山々を望むと自然のなかに包まれた想いでいっぱいになる。頂上付近からは時には太平洋が見え、木立のどこからかわグイスやメジロのさえずりが聞こえ、昼近くになると暖かい景色の良い場所を見つけて、にぎりめしのお弁当をひろげ昼食を取りますが、このおにぎりのおいしいこと、最高の味です。

他の一日は家のことや畑のことなどをして、家族と一緒に過ごすなど休みの使い方に変化がでてきて、自分の生活にとっておおいにプラスになっていると感じています。

しかしこの週休二日制が、自分達の住んでいる地域に進んでいるかと考えてみると、多くの家庭でノーと言わざるを得ません。また私の家庭をかえりみても、妻は日曜日と祭日が休み、長男は週一日の休みという現実です。

二十世紀までには、高知市でも大部分の人間に週休二日制が実現できるようになるのだからと考えると、日本経済はバブルの崩壊で不況が続いており、新規社員の採用取り消しなど厳しい状況にあります。

また労働時間の短縮についても、週四十六時間労働を一年延長などと週休二制に向けて進むのではなく、後退の感が強い今日の情勢です。

不況になるといつも働く人々を犠牲にするやり方ではなく、労働時間の短縮、週休二日制を進めることによって、働きバチと言われる私達の生き方が変わるような政策を今後とも求めていきたいと思えます。

(地方公務員)

私がいきいき

萩原 由恵



昭和二十年、敗戦を味わい貧しかった日本人は、戦争での痛手をかき消すかのように、経済の立て直しをはかるため働き続けた。みんながどん底から立ち上がって休むことも忘れ働き続けた。その結果、日本の経済は急激に成長し「経済大国日本」という異名をとるほど豊かな平和な国に変わっていた。そんな成長期の真ん中、私はこの世に生まれ、育ってきた。

高校生だった頃、私には世の中が週休何日だろうと全く興味もなかった。もっとも週休二日制を実施している企業も多くはなかったし、自分にとって何一つメリットがなかったから、余計、無関心だった。

あれから十年、社会人になった今考えてみる

と、日本人は働き過ぎていたと思う。豊かさを求めて頑張り過ぎていたと思う。経済が安定した今、人々は休日を求めはじめ、週休二日制を導入している企業は急激に増え、第二土曜日とも言え、学校までが休みになった。そんな時代の流れの中で週休二日制について考えてみた。私にとって自分の職場が完全週休二日制のため、社会人となってからはいろんな利点があった。一つは、祝日と併用や有休と併用で大型連休になり、そのため遠方への旅行なども可能になった。二つ目は、土曜日は雨ふりでも日曜日には晴れたりすることもあるから、掃除や洗濯にも役立つ。三つ目は、二日休みがあると、一日は体を休め、もう一日は余暇として使う。これなどは、私の代表的な週末の過ごし方である。

疲れた体を休めさせることも大切だし、旅行に行つて気分をリフレッシュさせることも本当に大切である。もともと私は旅行が大好きなので週休二日により土・日が休みだと、楽にいるんなところに行くことができる。

自分の好きなこと、自分のやりたかったことが実行できるとすごく気分がよくなり、月曜日からの五日間にまた、はずみをつけることができる。

十年前、高校生の私には何のメリットもなく興味すらなかった週休二日制、もし今、退職して転職するならば、私は週休二日制の企業を選ぶであろう。なぜなら自分の中で二日間のこの休みは大切なリズムであり、十年前とちがつて今の私は週休二日制の必要性を痛感し、メリットを知ってしまったからである。

(ヤングゼネレーション高知)

競輪と福祉に

山崎 勲



こう題しますと、水と油のように取れますが、そうでもないのです。私が競輪選手になったのは、昭和二十五年七月、満二十三歳の時でした。

それまでの二十三年間では、昭和ひと桁時代は日本が大変貧しい時代で、十年代は戦争に明け暮れ、遂には敗戦となり、食べる物さえ満足に無く、多くの国民が悲惨な生活を強いられていた時代でした。わが家はといえば、それに輪を掛けたような貧しい家庭でした。

競輪選手は金が儲かるという話にすらされて選手になり、三年後には日本でもトップクラスの選手になることが出来ました。当時の競輪は、社会悪の温床だとの非難を浴び、選手の私達も肩身の狭い思いをしたことでした。しかし私自身は、父親の散財によって住む家さえも無くなり、その上

私が十歳の時父親が死亡した後、散々苦勞して私達三人の子供を育ててくれた母親に、孝養をつくすことが出来ました。

二十七歳で家を建て、結婚し次々と健康な二人の子供にも恵まれ、このまま行けば、競輪で少々強かった一人の父親が、平凡で幸せな人生を送る筈だったので、人生には何が起こるか分かりません。

正に、人間万事塞翁が馬です。昭和三十八年八月、三番目の子供が出生の時、当直医の未熟さが元で脳性小児マヒになり、重症心身障害児となってしまいました。

初めの頃は脳性マヒというのが、どんな病気なのかも分からないまま、全国各地の病院を尋ね歩きました。そして分かった事は、脳性マヒは現在の医学では治らないという事と、このまま何もしないでいると、この子は一生寝たきりになってしまおうと

いう事でした。そうならない治療としては、リハビリテーションしかないと考え、方々手をつくしましたが、当時脳性マヒのリハビリを実施している病院等はありませんでした。その頃、東京都世田谷区に国立小児病院開院の新聞報道があり、最新の設備と、優秀なスタッフも揃っているとの内容でしたので、早速院長宛に手紙を出しました。

間もなくご返事を頂きましたが、脳性マヒは現在の医学では治らない病気なので、当院には入院出来ないとの事でした。その一方で、そういう人達の入所施設がありますので、そちらに相談されてはと、三カ所程の施設の名前と住所が書いてありました。それは既に私が訪問した所で、とても医療機関とは思えない様な施設でした。その後種々あって、三十七歳の時に施設づくりを決心しました。

しかし、私達の子供は三歳七カ月で、その短い生命を終わりました。施設が完成したのは、それから三年三カ月後の、昭和四十五年六月のことです。決心してより五年余りがたつてからでした。この五年間は心労の連続でしたが、妻を初め家族全員の協力と、何よりも全国各地よりの物心両面でのご援助の御陰があつて、どうにか頑張れました。

当初予定した土佐山田町では、地元住民の反対から建設中止となりまして、南国市からのお誘いがあつて現在地に建設することが出来ました。その建築資金の大半は、競輪からの補助金です。勿論これは私が競輪選手だったからではありません。どなたでも福祉施設を建設する場合は、申請によって補助金はおります。

当初反対だった県や、県内市町村よりの補助もありました。その他、選手を初めとする競輪に関係する方々や、全国各地の全く見ず知らずの人達からも、沢山のご寄附がありました。この事は、全く畑違いの競輪選手が、わが子の事から思い立って、その子が死んだ後もなお初心を貫き通したという親の心情が、共感と呼んできたのでしょうか。僅か三歳七カ月の短い生命で、一言の言葉も話す事は

出来ませんでした。私達二親には、百万言を語ってくれました。それまでの私達には、全く無かった何かを残してくれました。親孝行な息子でした。

現施設を設立する四年前の四十一年六月、土佐山田町内の一農家を借りて、私立の重症児施設「憩の家」というのを開設しました。

多い時は八人の重症児をお預かりしていましたが、その様子がテレビ、新聞等で全国に報道され、多くの方々から、励ましのお電話やお手紙を頂きました。

しかし一人だけ男の声で、「山崎、お前はいらん事をすな、そんな子は早う死んだが幸せじゃ、税金の無駄使いや」と言われました。

私の返事は、「この施設は、私が競輪で稼いだお金でやっていますので、税金は一円も使っていません。多分私は、あなたより税金を多く払っていると思いますが」と言っ



土佐希望の家開園20周年

土佐希望の家 開園20周年記念式典

りました。その時、私は三十八歳になっていましたので、選手としての力も峠を越して、やや下り坂になりつつありました。それでも私は、選手として

が接近するとは後は気力です。レースは大変苛酷で危険です。選手生活三十五年間に、七、八十回は落車し、鎖骨骨折四回、脳震盪により意識不明となること三回、その上コンクリートとの摩擦による擦過傷は、身体中の至る所に出来ま

だからといって、落車を恐れていては試合に勝てません。選手は、本人の体力・脚質によってその戦法を大別すると、先行型と追込型に分かれています。この他にマクリというのがありますが、これは非常手段です。競輪競走の勝敗には、位置取りが重要で、最後の直線で前から何番に居るのかによって、その勝敗が大きく左右されます。後方になった選手が、直線に入る前に早目に全力で前方選手を抜いて行くのを、マクリとい

安定した成績を残すためには、この戦法を身に付ける事が大切です。私は先行マクリ型で、現役三十五年間で六百七十四勝を挙げました。これは高知県内選手では最高で、今の現役選手の中では破れそうにありませんので、強力な新人選手の出現を期待しています。

私の昭和は、国も個人も波乱万丈でしたが、平成になつてもやはり、平安な老後とは行かないようです。(社会福祉法人「土佐希望の家」理事長)

新刊

珍聞土佐物語 上巻 依光 裕編著

五十人の語り部たち

四六版 392頁 定価 1,600円

つい三十年程前まで山村で、農村で、漁村で当たり前に見かけられた三世代同居の団欒。そこで語り継がれてきた伝説や小咄。放送局勤務の著者が昭和三十年代に取材、投稿で得た数々の咄を『語り部』別にまとめた土佐咄の集大成。

(下巻)発売予定 '93年5月下旬



高知の山と森 (七)

網附森

西村 武二

物部川の下流右岸の南国市に住む人々にとって、網附森と白髪山は親しい山である。その名前は知らなくても、冬の澄みきった空の下、物部川上流方向はるかかなたに白く雪を頂いたこの二山を認めた人は多いだろう。左の長い頂稜をもつ山が網附森、右の均整の取れた三角形の山が白髪山である。

網附森への道は西熊溪谷堂床の上部の網附森登山口(標高九六〇メートル)から始まる。小さな尾根を越えて堂床谷の斜面に入り、その谷の支沢に沿って登りつめ県境尾根にあがって、後は忠実に尾根筋をたどればよい。

ブナ、ウラジロモミ、トチノキ、ケヤキ、ハリギリ、ヒメシヤラなどの大木を眺めながら山腹を横断し、県境尾根に向かって登っていくこの道は、奥山の雰囲気にはたれる素晴らしいコースだ。ミズナラ、ツガ、ヒノキの大木も混じり、木の間越し



網附森(祖谷越からの稜線より望む)

背後に白髪山から三嶺にかけての稜線がよく見える。登山口から約一時間三〇分、快適な登りで標高一四八〇メートルの稜線に達する。

ここから南西方向に県境の尾根筋をたどる。道はたちまち胸ほどの高さのスズタケに行く手を遮られる。ササをかき分けかき分け踏み跡を確かめつつ、探り足で進まなければならぬ。ササの高さが膝ぐらいになると急に足が軽くなり、景色を楽しむ余裕も出てくる。所々にダケカンバの大木があり、それから飛んだ種から発生したと思われる若い林があちこち尾根筋に群落をつくっている。スズタケの原にミズナラ、ダケカンバ、ウラジロモミ林が断続する。

一五五二メートルの峰を越えた所は広い平坦地となり、ダケカンバ林とウラジロモミ林が丈の低いササ原の中に散在し、近くには水場もある。藪こぎで汗みどろになった身にとっては、一息入れたくなるような別天地だ。ここをブルンベ平という。ブルンベとは長崎県島原地方の方言でギンバエのことをいう。島原出身の高知大学山岳部員のK君(同君は前々号で記したように、土小屋から桑瀬峠までの縦走につきあってくれた)がここで沢山のギンバエに悩まされ

思わず発したお国言葉がそのまま山岳部で地名に採用されたという。果してどれくらいの人々の間でこの名は定着しているのだろうか。

まわりの景色を楽しんだのも束の間、またしても胸から背丈ほどのササの中に突っ込んでいく。ササをかき分ければ隠れていた道が分かるので、ルートさえ外さなければそれほどつらくはない。ササの丈が低くなると頂上は近い。

網附森(一六四三メートル)の頂上は一面広いササ原になっていて、二等三角点の矢倉が立っている。ここまで稜線に出てから一時間余りかかった。道さえ整備されれば、この尾根筋は眺望に恵まれた素晴らしい登山コースになるだろう。西熊溪谷の流域の最南端に位置するので、ここからは三嶺を中心とし、流域の全貌が見渡せる。さらに躰峠から天狗塚、牛の背方面、西に矢筈山、笹方面も含めると、西熊溪谷を隔てて東にある白髪山の岩場からの眺望に優るとも劣らない。西の祖谷越(矢筈峠)からの広い尾根筋も、森林とササ原が交互に現れるたいへん眺望のよいコースだが道が荒れている。祖谷越、網附森、躰峠間の登山道の整備を望みたい。林野庁・営林局が推進する「人と森林とのふれ合いの場の創造」の格好のモデルとなりうる

ところだろう。

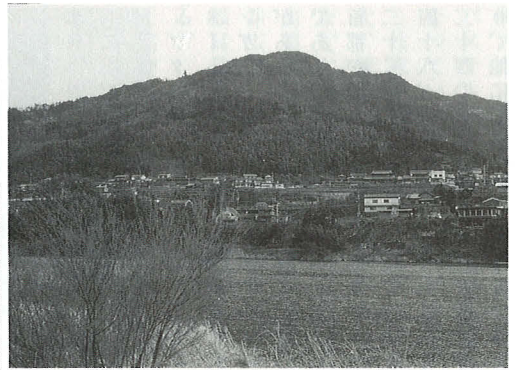
ところで網附森とはいわくのありそうな山名だ。「コンサイス日本山名辞典」(三省堂発行)によれば、網付という名前の山が四山記載されているが、それが全部四国にある。他の三つの網付山は愛媛県小松町と西条市の境界、徳島県井川町内、そして徳島県穴吹町と木屋平村との境界にある。同名なのでおそらく共通の由来があるに違いないと思つて地元の高老や役所に照会して調べてみた。

物部川の網附森には、昔この辺りは海であり、この山に船をつなぎとめたという伝承があった。

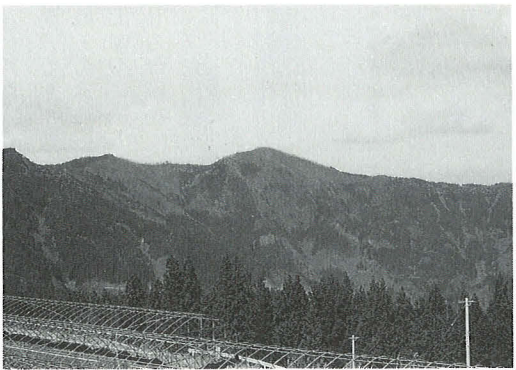
井川町の網付山(五八〇メートル)にも同様の伝承があった。昔はこの辺りに大水がでて、まわりが湖のようになった。浮かんだ船をつなぎとめたのが網付山であるという話である。

穴吹町と木屋平村の境界の網付山(一二五五メートル)には、この山の東の尾根続きに「フナクボ」という、ちょうど船のような形の窪地がある。これを船に見立てて、それをつなぎとめる山という意味で網付山と名付けたということだった。そういえば、網附森にも二重山稜のフナクボ地形が見られる。

小松町と西条市境界の網付山(五二〇メートル)にはその様な伝承は



徳島県井川町の網付山(吉野川畔より望む)



木屋平村と穴吹町境の網付山(中尾山高原より望む)

なかった。しかし小松町の教育委員会からの資料によつて次のようなことがわかった。

外崎光広著 土佐自由民権運動史 定価二、八〇〇円	A5判 四二四頁
清遠 幸男(高知レポート5) 高知県の工業 定価一、〇〇〇円	A5判 一二二頁
土居重俊監修 高知市文化振興事業団編 土佐弁 土佐日記 定価一、〇〇〇円	B6判 一三〇頁
岡林清水著 高知県文学散歩 定価一、八〇〇円	四六判 二七八頁
高知の文化を考える会編 高知市文化振興事業団編 わがまち百景 定価一、二〇〇円	A5判 一八八頁
高知の文化を考える会編 高知市文化振興事業団編 高知の森林 定価二、五〇〇円	A5判 二二八頁
筒井広道著 画帳の歳月 定価二、〇〇〇円	A5変 二五六頁
上森千秋著 流れと波の科学 定価一、五〇〇円	A5判 二四〇頁
土居重俊著 土佐日記 全訳注 定価一、八〇〇円	A5判 一一八頁
土居重俊・浜田敦義編 高知県方言辞典 定価六、〇〇〇円	A5判 七三六頁
高木啓夫著 土佐の芸能 定価四、八〇〇円	B5変 三四六頁
清水孝之著 中山高陽 定価三、八〇〇円	A5判 三六六頁
外崎光広編 土佐自由民権資料集 定価三、〇〇〇円	A5判 三四四頁
今井嘉彦著(高知レポート2) 河川はよみがえるか 定価一、〇〇〇円	A5判 一〇八頁

*は税抜き価格です

小松藩三代藩主一柳頼徳は詩歌に堪能で、六一番札所香園寺の十景詩を元禄一四年(一七〇一)に詠んでいるが、それには網付山が纜附山の字で記されているのである。「纜」とは「ともづな」、すなわち船を岸につなぐ綱のことなのだ。またこの山はその昔石鎚山参拝のための登山路が通っていた。中国地方から詰めかけた大勢の石鎚山の信者たちは西条の港に船着けしたということだが、彼らは船上でこれからたどる山を見つけて、船をつなぐ山と見立て網付山と呼んだのではないかと私は思っている。

以上のようにどの山も船をつなぎとめる山という共通の由来がある。四山とも似たようなならかな山容で、そういう思いで見ればなるほど船をつなぎとめるのによい形なのかという気がしないでもない。

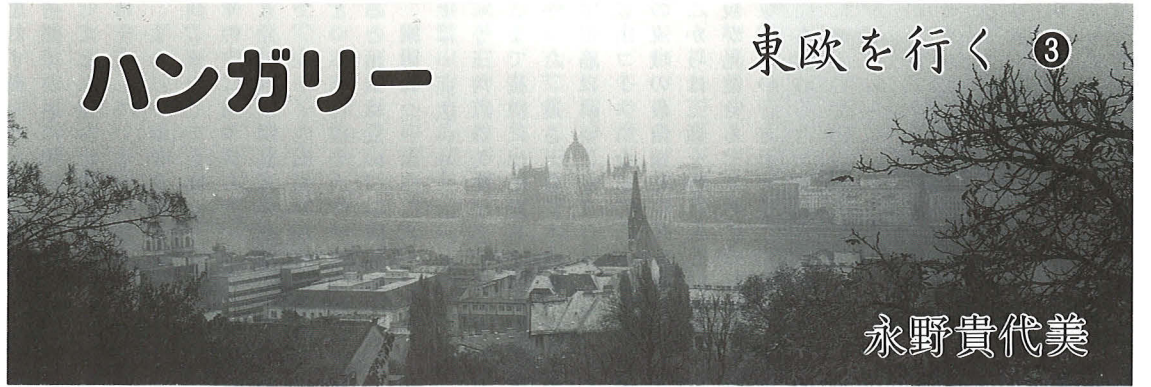
この網付山名の伝播は、かつての交通を考えると、四国の玄関口にあたる小松、西条境からはじまり、吉野川畔、ついで穴吹川をさかのぼり木屋平、穴吹境へと伝わり、そこから祖谷谷へ通じる山道を通つて物部川の網附森へたどり着いたと思えるのだが……。

想像の域をでないが興味のあるところだ。(高知大学農学部助教)

お申し込みは最寄の書店が事業団まで

ハンガリー

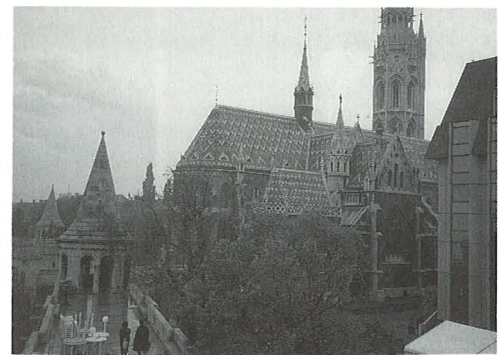
永野貴代美



写真I ドナウを挟んで向こう側がブダ地区(中央は旧王宮)、手前がペスト地区

ハンガリーは、四国と九州を合わせた程の国土でその七十五パーセントが耕地という豊かな農業国。国民総人口の五分の一に当たる二百万人が集中する首都ブダペストは、「ドナウの真珠」「ドナウのバラ」「ドナウの女王」とうたわれる美しい街だ。周知の如く、街はドナウ川をはさんで旧王宮のあるブダ地区と商業の街ペスト地区に分かれる(写真I)。

なだらかな丘が続く西岸ブダ地区は、アルパート王朝が栄えた十三世紀以来王宮のおひざ下として常に歴史の舞台となった中世ヨーロッパ最大の都市だ。王宮の丘(写真II)には、ネオ・ゴシック様式のマーチャーシュ教会、ネオ・ロマネスク様式のハンガリー初代王イシュトヴァーン一世の像など数多くの歴史的建造物があり、ここからドナウを眺めていると中世にタイムスリップしたような幻想にとらわれる。そんな思いを一瞬に打ち砕いてしまうのが、壁面ガラス張りの超近代的建物、ヒルトンホテルだ。このホテルは計画からオープンまで十五年もかかったといういわくつきのものだが、その理由は建っている場所にある。十三世紀中ごろにつくられたドメニコ寺院と十二世紀に建てられた聖ニコラス寺院の二つの史蹟にまたがっていたた



写真II 王宮の丘。右手に一部見えるのがヒルトンホテル

メートル、ルーマニア国境近くにハンガリー第二の都市デブレツェンがある。ここは文化・教育の中心地であり、歴史上、二度ハンガリーの首都が置かれた地でもある。人口約二十二万人、それに対して、幼稚園四十八、初等学校三十八をはじめ百二十四の市立学校及び教育施設があり、他に私立学校、国立大学等、街



写真III デブレツェン市 ナジ・ガーボル教育部長

によるゆがみや弊害の実態も知ってほしいと思ったが、経済発展、国づくりが先決のこの国にとっては、ずっと遠い将来の問題なのだと思いついた。

め、市民の多くが不満を持ち、建設に強く反対したのだ。今、ホテルは北館、南館に分かれ、その間に聖ニコラス寺院の本堂を両側から支えるような形で建っているが、付近の景観との違和感否めない。資本主義大国の経済力を楯にした横暴だと感じるのは私だけだろうか。

中学校だらけといった印象を受ける。そして市内の幼稚園及び初等教育(義務教育)は、公・私立にかかわらずその経費の全てを国と市で負担している。

「教育予算はかなり市の財政を圧迫しているが教育費を削ることはできない。日本では産業発展の基本は教育だったと聞いている。この街においてもそういう道を辿れると信じている」と、教育部長のナジ・ガーボル氏(写真III)は言う。学力偏重

文化のひろば

⑧

県下唯一の町立美術館

—中土佐町立美術館—

土佐の三大祭りの一つ御神穀祭で知られる久礼の八幡様、この八幡宮境内の北隣りの一角に、コミュニティーセンター・文化会館とともに県内には珍しい町立美術館がある。

もともとこの辺りは営林署の貯木場であったものを、町が払い下げを受け文化ゾーンとして整備した地区であり、近くの大正市場辺りの古い裏通りとは、対象的なものとなっている。

現中土佐町は、旧久礼町と上ノ江町が昭和三十二年に合併してできた町であるが、ちょうど合併三十周年記念の頃、同町矢井賀出身の実業家町田菊一氏からの申し出により、この館は誕生することになる。

町田氏は自分の蒐集した絵画のコレクション一七〇点と、美術館を建設してこれをそっくり町に寄贈し、年号も改まった平成元年六月一日、県下では初めての町立美術館が開館した。

館は白壁土蔵造り、周りの植栽と

マッチして非常に落ちついた雰囲気。まず玄関脇には、韓国でつくられたという一對のトラの石像が鎮座している。これも町田氏の寄贈によるものであるが、大きな図体に似合わない愛嬌のある顔で迎えてくれる。

またすぐ横には作家司馬遼太郎の揮毫した「土佐にきて、嬉しきものは、言葉に、魚に、人のあし音」の碑があるし、館の表札も氏によるものという。

現在収蔵作品は三二六六、このうち約三〇〇点は町が購入したものであるが、他は開館後もひき続き町田氏が寄贈をしてくれ、その数を増してきた。

内訳をみると版画が最も多く一〇八、次に油彩八九点、浮世絵

版画八四点、その他日本画、水彩画、パステル、デッサン、書等四五点となっている。

作家では黒田清輝、竹久夢二、林武、棟方志功、小磯良平、宮本三郎など、また県内作家では石川寅治、山脇信徳、今西中通、小松益喜、筒井広道、奥谷博、そして同町出身の福富榮など合計九十一名となっている。

建物は約一五四平方メートル、展示スペースに約五〇点が展示可能であり、作品は四カ月に一度の割で順

次入れ替えを行っている。

開館以来の入館者は三月末で約二万七千五百人、国道56号線から車で二、三分ということもあり、町外からの見学者が圧倒的に多く、県内外にも知名度を高めているといえようか。

この他、他県に働きにでている町の出身者が帰省すると必ず見学に足を運ぶという、わが町自慢という存在にもなってきている。

県下における文化施設のおくれが言われる中で、中土佐町がこうした美術館を持つことは町民にとっても誇りであろう。次々と作品も追加購入されているようで、今後さらに特色ある美術館として発展することが期待される。

館長の小島正一氏は町田氏の先輩にもあたり、町の教育長を二期つとめた後、開館にあたり館長に就き現在に至っている。

今後について、隣県の久万町立美術館、玉川町立美術館等と呼びかけ、相互に収蔵作品の交流展などを開いてみて、夢はふくらむ。

「かつおの一本釣りのまち」、そしてここにつくられた「潮騒」が聞こえる素敵な美術館は、高知からでも車でわずか一時間あまり。

開館時間・午前10時～午後5時
休館日・毎週月曜日及び12月28日
1月4日



中土佐町立美術館

自由民権運動の研究書

一九八一年から始まった「自由民権百年」事業をきっかけに、全国的に巻き起こった新しい史実の発掘・報告・研究の成果を吸収する自由民権史が出現するに違いないが、それは今後に期待し、現在市販されている全国的通史を挙げることにしよう。

色川大吉著『近代国家の出發』（中央公論社）、後藤靖著『自由民権運動の展開』（有斐閣）、遠山茂樹著『日本近代史Ⅰ』（岩波書店）、永井秀夫著『自由民権』（小学館）は著名な民権研究者の、しかも版を重ねている自由民権運動史である。

土佐の自由民権を正しく理解するためには、今日の研究を理解し、それとの関連を視野に入れることが必須の前提と考え、全国的通史を列挙した次第である。さもないと、かつてのように土佐の自由民権はお国自慢の伝説になりかねないからである。憲政史の研究者であり大審院の判

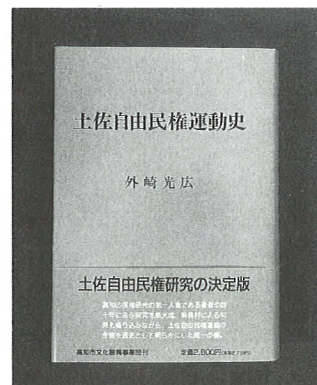
事でもあった尾佐竹猛は、往時の土佐は実に自由民権のエルサリウム（聖地）であり、青年政客は必ず土佐を訪ねなくては談ずるに足らなかつたのである、と書いている。

徳富猪一郎（蘇峰）も巡礼者で、彼は熊本で経営の大正義塾生を引率し、明治十七年夏四国山脈を越えて高知入りしている。

こうして土佐は自由民権を誇示しているのだが、民権研究は至って低調でその不振は長く続いてきた。著名な民権家を顕彰する伝記や、選挙干渉など新聞・雑誌に掲載された調査・報告の類は多いものの、土佐民権の体系的解明を試みた単行本は、立志社創立から八十一年を経た一九五五年（昭和三十年）一月二十日高知市民図書館発行、平尾道雄著の『立志社と民権運動』が最初の労作であった。

同氏はこの画期的著書に続けて『土佐百年史話―民権運動への道―』（浪速社）、『自由民権の系譜―土佐派の場合―』（高知市民図書館）を公刊した。

その後外崎光広著『土佐の自由民権』（高知市民図書館）・同『土佐自由民権運動史』（高知市文化振興事業団）が公刊された。



土佐自由民権運動の歴史的 성격について、平尾氏は維新勤王運動の継続・発展と規定し、その源流を一八七〇年十二月の高知藩論告「人民平均ノ理」↓一八六八年三月の「五カ条の誓文」↓一八六七年十一月の坂本龍馬「新政府綱領八策」↓一八六七年十月の土佐藩「大政奉還建白」↓一八六七年六月の坂本龍馬「船中八策」とさかのぼる。

これに対し外崎は維新勤王運動と自由民権運動の断絶を主張し、その歴史的性格をブルジョア革命運動と規定している。

なお自由民権百年全国集会実行委員会編『自由民権運動研究文献目録』（三省堂）は便利有益である。（外崎光広）

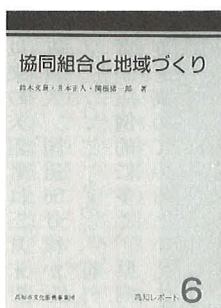


高知レポート6

協同組合と地域づくり

鈴木文燾・井本正人・関根猪一郎 著

農産物輸入自由化や合併、金融自由化の流れの中で揺れる農協や信用金庫、急成長が目される生協など、高知市を中心とした協同組合組織の現状と課題を挙げ、相互のネットワーク形成など、協同組合を地域づくりの視点から分析した初めての書。 A5判・136頁・定価1,000円(税込)



第9回高知の映像コンテスト入賞作品

高知を撮る

五台山夜景 国沢 隆義

昔は小学生でも三、四年生になれば、自分で布団を敷き、朝はそれを片づけるのが日課のひとつだった。今はベッドが多くなりその必要がなくなった。部屋の掃除も母親がするし、洗濯なども親の仕事である。

子供が成長するにしたがって増えた家事の手伝いも、今は逆に年齢が上がるにしたがって減って、塾通いや勉強が中心になっている。親も子も「子供は勉強さえしていればいい」ということになっている。

かくして、火が起かせない、ナイフで鉛筆が削れない、リンゴの皮がむけない、箸が正しく持てない、マナーが身につかないという子供がふえてきた。

入試のための学力をつけ、いい進学校に入り、一流会社に就職することが目標という風潮からすれば、家事の手伝いなど、どうでもいいことも知れないが、以前は、こうした事がどれだけでもできているので、人間形成の興行きははかられたものだ。そしてそこに家庭の「格」のようなものがあつた。

教育の矮小化



風俗歳時記

家庭は教育の場であり、言うところの「庭訓」が生きていた。それはまた、人としての「生き方」を教える重要なものでもあつた。

ある日突然、子供に向かって大人になれと言っても、急になれるものではない。大人としての責任、役割、分別などを、発達段階を追いながら段々と身につけていってこそ、備わっていくものである。だが、現在の子供たちは、そうしたことを素通りさせたまま大人になっている。したがっていざ就職しても、「大人」にようになりきっていない若者がいて、職場を戸惑わせることになる。

そこでもう一度「教育」とはなんたるかを考えるのだが、いまの世の中異常なほどの教育熱心でありながら、その実態は「学力」を矮小化し、「生活経験」を矮小化し、ひいては「教育」そのものを、目先の功利のなかに矮小化し埋没させているのではないか。このつけは、だれがいつはらうのか。

(再)

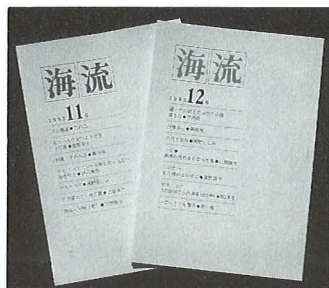
詩を書くことを面白く

江部 俊夫

詩誌「海流」

独断と偏見。面白さというものは、その中にあるだろう。だが、独断と偏見といつても、それをもつことはむずかしいものだ。

とにかく、独断と偏見をお互いに認め合いながら、詩を書いていこうと集まり、一九九〇年四月五日に創刊する。亜細亜書房の国則さんの力がなかったら、発行することは困難であった。



「海流」は年四回発行。発行ごとに合評会をやっている。喫茶店の片隅でコーヒを飲みながら、おしゃべりするのは楽しい。かた苦しい批評会でなく、和気あいあい。

同人は、公務員、主婦、小・高教師、農業、風来坊なんかである。

今年から、月一回詩の勉強会を行っている。詩を一二編持ってき、当番の者がその詩について感想を言い、話題提供をする。そのあとで、口々にというところ。

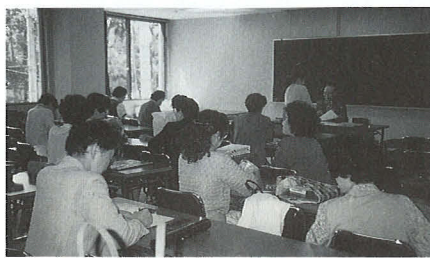
かな文化にもふれながら

篠原 員子

かな書「翠の会」

「翠の会」は、昭和五十三年に発足しました。当時、市民学校で川添龍翠先生のかな書道の指導を受けた第一回終了生が、なお引き続いての学習を希望し、そのOBのみによるこの会が生まれたものです。当時は爽やかな季節であった事と、この会が何時までも爽やかな会であって欲しいとの願いのもとに「翠の会」と命名し、また龍翠の「翠」とも合致し爽やかなスタートを切りました。

稽古日は毎週木曜日の午前十時より十二時迄とし、万葉集や古今和歌集等、日本古来の「かな文化」に触れつつその歌の心を学び、新旧織り混ぜての課題に一同挑戦し楽しんでいきます。技を磨く為には厳しさもありますが、先生のご指導の中には笑いがあり、教室は何時も和やかなムードに包まれ、時々見せて下さる先生のすばらしい筆運び、紙面に流れるリズムにいつしか息をこらして見入る私どもです。毎月書誌



庶民の生活の詩を

堅田 正峰

「あたご川柳会」

高知新聞夕刊に好評連載中のコラム「出放題」の常連で活躍した、ペンネーム「フクロウ」の故山崎宣広氏が、昭和十九年三月、川柳同好者に呼びかけて、柳誌「大風」を発行してスタートした。



その後、愛好者を増やして支部「高須文珠会」を、平成元年四月には、同じく「あたご川柳会」を結成し、どなたにも気軽に参加してもらえる川柳会を目指して頑張っている。

「あたご川柳会」は毎月第二日曜日午後二時から江ノ口図書館で例会を開いている。職業や年齢性別は問わず、川柳を楽しむ人達の勉強会である。

川柳は「からいもの詩」だと入門当時感想文を書いたことがある。さつまいもではなく、土にまみれ、汗の臭いのする庶民の生活の詩、「これが川柳なり」と飾り気のない魅力がこの道に入った人をとりこにすること請け合いです。

彩りの美しさに魅せられて

貞広 栄子

七宝焼「釉の会」

ある日出会った七宝焼は、不透明な「ひすい」の色に、同じく不透明な白色をポツンとのせて焼成したデコボコの「プロイチ」でした。でも何と美しい彩りだろうと感心したことでした。

全く我流の独学で、一枚のプリントを頼りに七宝焼を始め、毎夜失敗の連続で焼いたことも今は懐かしい思い出となり、三十年前かが過ぎました。

私個人としては年に三〜四回、東京の研修に参加し新しい技法を学んだり、出会った友人との会話の中の発見に得るところが多かったのですが、今は最古参の仲間入りをしています。

七宝焼「釉の会」は、気の合った友人達とグループ活動を始め、仲間が多くなった昭和五十年頃発足して、現在会員数は、百名位に達しています。

彩り、彩りの美しさ、重なる彩りの素晴らしさを共に学びながら、



ろ。五月は、まどみちおの詩について話し合いの行き着く先は分からない。話はずむと、学校教育のこと、世の中のできごと、絵画、音楽、etc、おもむくままの勉強会である。

全くおそろしいもの知らず。やること自体に充実感があるから、結果はどうあれ、詩画展等も考えている。

合評会、詩の勉強会には、どなたでも歓迎します。連絡先 香美郡土佐山田町仁井田 電話 〇八八七五―二一四八四五

「二束」には競書を出品し、年一回「書作展」を開き私どもの一年間の学習の成果を一般の方にも見て頂く会としています。書くだけでなく各種美術展、書道展個展等の見学鑑賞、昼食時の四方山話に思わぬ人生の収穫を得る事も度々です。すばらしい「書」との出合い、素敵な先生と友達との出合いに感謝しながら、これからも爽やかな会であり続けるよう願っています。

連絡先 高知市仁井田一五三三一 有光 昌子 電話 〇八八八―四七三〇二六

る庶民の生活の詩、「これが川柳なり」と飾り気のない魅力がこの道に入った人をとりこにすること請け合いです。日常生活の中で日々繰り返されるあらゆる人間模様を十七文字に託して表現する。人間の心をそのままにすればいいわけで、ストレスの解消に役立つし、勿論頭の体操にも効果があり、特に近頃強調されているボケ防止にもつながる。これは全員が認めるところ。どなたでもお気軽に参加して欲しい。

連絡先 高知市寿町七―一〇 電話 〇八八八―二三三―一八〇五

何時までも若く美しくをモットーに、そして美しく老いるを語り合ったり、楽しい集いです。現在、月・金の週一回創作活動が続け、五月の「母の日作品展」、八月の「手づくりライフ展」を行うほか、十二月は郵便局の行っている「歳末チャリティー展」に参加出品もしています。

創作の喜びに加え、作品展では皆さん方に見ていただく嬉しさがあります。そしてまた作る楽しさが湧いてきます。連絡先 高知市南宝永町二二―一五 電話 〇八八八―八三三―五八五〇

風伯

施設競合時代

今治市河野美術館で、マリー・ローランサン展が開かれていて見に行った。高知から二時間、車でゆくと県内各市から各市へ移動するより場合によっては時間がかからない。県境、県単位という発想を大きく変える時代になってきているといっている。マリー・ローランサン展は、瀬戸内海に

面したおだやかな今治市にふさわしい展示だった。人は高松や松山からもきていたのではなかったか。場内は混みあっていて盛況だった。作品は長野県蓼科のマリー・ローランサン美術館からきていた。冬期の蓼科は客足がへる。美術館も入りが少ない。そこで冬期は貸し出しにも応じているとの

ことだった。こうした双方の積極的な発想もあざやかだった。一九〇〇年代前半に詩もかき、文もかいたフランスの女流画家ローランサンの絵は、淡い色調のなかに抒情と官能と夢をたたよわせており、酔わせるものをもっていた。展示作品一五〇点あまりは第一次世界大戦第二次世界大戦の影も、そして彼女の生き方もつうつらと、にじませているように見えた。

これをみながら中都市文化ということも思った。こうした企画をし、人を集める力を持つているとは、中都市とはいえず今治市は底力を持っているのではないか。それにくらべて高知の場合はどうであろうか。県単位をこえて人をひきよせる力と企画を考えさせられた。いまや全国、どこの施設も競合時代なのである。(睦)



散歩の途中で

ここは、さえば商店街を少し西に入った三叉路。この「路上」に「防火守護の神」として秋葉さまが鎮座している。終戦直後、バラック建家屋が密集していた頃、この辺りでは火災が度々発生したことから町内の者が話し合い、仁淀村の秋葉神社を勧請、当時は道端であった空地に祭ったもの。暮のお祭りは現在も続けられ、その後は大した火災もないという。

文化セミナー '93

私たちをとりまく社会状況はめまぐるしく変化し、私たちはいやおうなしにその対応を迫られています。現代に生きる私たちは、社会にどう関わることができるのでしょうか。現代社会の中で何が起り、そしてそれは将来にどのような影響を及ぼすのでしょうか。様々な社会現象を通して浮かび上がってくる現代を分析し、来るべき社会に何が求められているのかを探ります。

- ◇ 6月4日(金) 午後1時30分～ テーマ：『輸入食品は安全か』
講師：小若 順一 食品評論家
- ◇ 6月18日(金) 午後1時30分～ テーマ：『現代の世相から未来を読む』
講師：高田 公理 武庫川女子大学教授
- ◇ 7月2日(金) 午後1時30分～ テーマ：『越境の倫理学—異質なものととも生きる方法—』
講師：今福 龍太 中部大学助教授
- ◇ 7月16日(金) 午後1時30分～ テーマ：『こころの支え—高齢化社会に向かって—』
講師：重松 宗育 静岡大学教授
- ◇ 7月28日(水) 午後1時30分～ テーマ：『高校生はどう変容してきたか—学校の揺らぎとこれからの方向性—』
講師：諏訪 哲二 川越女子高等学校教諭

*** 会場はいずれも高知共済会館3階ホールです。***

参加費：各回500円 定員：申込先着100名

— お申し込み、お問い合わせは文化振興事業団まで —

シリーズ「現代を読む」

(5月～8月)

私たちの身のまわりにある様々なテーマを分かりやすく、かつ徹底的に解説。

◎遊びの原像を探る

西村秀樹氏
(高知女子大学助教授)

- 5月13日(木) ①「生命力の再生」と遊び
- 5月20日(木) ② 物見遊山の原点をみる

◎『森の生活』～H・D・ソローを読む～

上岡克己氏
(高知大学助教授)

- 5月18日(火) ①『森の生活』の知恵
- 5月25日(火) ② ソローと自然保護

◎心の深層を探究する

高野祥子氏
(高知心理療法研究所長)

- 箱庭療法から見たこどもたち
- 6月1日(火) ① 集団のなかの孤独—小学生のケース—
- 6月8日(火) ② 対人関係のつまづき—中高生のケース—

◎思春期の心とからだ

渋谷恵子氏
(高知医大保健管理センター医師)

7月20日(火)

◎子育ての民俗に学ぶ

坂本正夫氏
(高知大学非常勤講師)

7月27日(火)

◎書くことは感じること

越智康夫氏
(高知小学校教諭)

～作文にみる友達・学校・家庭～

◎日仏の漫画と絵本に学ぶことばの世界

岡本克人氏
(高知大学助教授)

8月24日(火)

■会場 市民フロア(デネットターミナルビル5階・85-12393/駐車場はありませぬ)

■時間 右曜日の午後6時30分～8時30分

■定員 各回40人(定員になり次第締切)

■受講料 各回400円(資料代を含む)

■申し込み先 高知市文化振興事業団まで

*電話かハガキ(住所・氏名・電話番号・受講希望日を明記)で、事業団まで。
*欠席される場合は、事前に連絡をお願いします。